

ダニエル書 - 第四十六号

休息とリフレッシュ

Jeff Pippenger

2024-01-10

彼は誰に知識を教え、誰に教えを悟らせるのか。乳離れした者、乳房から引き離された者にである。というのも、「戒めに戒めを重ね、戒めに戒めを重ね、規則に規則を重ね、規則に規則を重ね、ここで少し、そこで少し」でなければならないからだ。彼はども唇と異なる舌でこの民に語る。彼らに向かって、「これこそ、疲れた者を休ませる安息。これこそ潤いだ」と言われたのに、彼らは聞こうとしなかった。こうして主の言葉は、彼らにとって「戒めに戒めを重ね、戒めに戒めを重ね、規則に規則を重ね、規則に規則を重ね、ここで少し、そこで少し」となり、彼らが行って後ろに倒れ、砕かれ、罨にかかって捕らえられるためである。だから、エルサレムにいるこの民を治める嘲る者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたはこう言ったからだ——「私たちは死と契約を結び、よみと同盟を結んだ。押し寄せるむちが通り過ぎても、私たちに及ばない。偽りを避け所とし、虚偽のもとに身を隠したからだ。」それゆえ、主なる神はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに一つの石を据える。基のための石、試みに耐えた石、尊い隅のかしら石、確かな基。信じる者は慌てふためくことがない。わたしは測り縄としてさばきを置き、下げ振りとして義を置く。雹は偽りの避け所を掃い去り、大水は隠れ場を押し流す。あなたがたの死との契約は破棄され、よみとの同盟は立たない。押し寄せるむちが通り過ぎるとき、あなたがたはそれに踏みにじられる。」イザヤ書 28:9-18.

1863年に、エルサレムを支配していた嘲る者たちは、ミラーの宝石を覆い隠し、それらを偽物の硬貨や宝石にすり替えるという段階的な働きを始めた。そうすることで彼らは「死と契約を結び」、彼らは「偽り」を自分たちの「避け所」とし、「偽りのもとに」「身を隠した」。しかし彼らは、使徒行伝でペテロが語る「安息」と「刷新」の終わりの日のメッセージによって試されることになっていた。

しかし、神があらかじめすべての預言者の口を通して、キリストが苦しみを受けるべきことを示しておられたそのことを、このように成就された。ゆえに、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られ、主の御前から憩いの時が訪れ、あなたがたに先に宣べ伝えられたイエス・キリストを神はお遣わしになる。この方は、世の初め以来、神がその聖なるすべての預言者の口を通して語ってこられた万物の回復の時が来るまで、天にとどまっていなければならない。モーセは確かに先祖たちにこう言いました。「あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、私に似たひとりの預言者をあなたがたのために起こされる。彼があなたがたに語ることは何であれ、すべて彼の言うことを聞きなさい。そして、その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から断ち滅ぼされるであろう。」また、サムエルから後に続くすべての預言者も、語った者は皆、この日々のことを同じように前もって告げている。使徒の働き 3:18-24

ペテロは、すべての預言者が「回復の時」と「後の雨」について語っていることを指摘している。また、罪が拭い去られ、後の雨が降っている、調査審判の結びに起こる最後の「回復の時」を退ける者たちを指し示しているのはイザヤである。その時、イザヤが言及する「死と契約を結んだ」者たちは、ペテロによれば「民の中から断たれる」。ホワイト姉妹は、このイザヤが言う「安息と回復」のまさにその時について、しばしば言及している。

第三天使のメッセージの宣言に加わる天使は、その栄光によって全地を照らすであろう。ここには、世界的規模でこれまでにない力をもつ働きが予告されている。1840年から44年の再臨運動は、神の力の栄光に満ちた現れであった。第一天使のメッセージは世界のあらゆる宣教地にまで運ばれ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来いずれの地でも目撃されたことのないほどの宗教的関心が起こった。しかし、これらは、第三天使の最後の警告のもとで起こる力強い運動によって、なおいっそう凌駕されるだろう。

その働きはペンテコステの日の出来事と同様になるだろう。福音の始まりに、聖霊の注ぎによって尊い種が芽生えるために「初めの雨」が与えられたように、その終わりには収穫を成熟させるために「後の雨」が与えられる。「そうすれば、私たちは主を知ることが求め続けて、主を知るようになる。主の現れは暁のように確かで、主は雨のように、地に降る後の雨と初めの雨のように、私たちのところに来られる。」ホセア書 6:3。「シオンの子らよ、喜び楽しめ、あなたがたの神、主にあつて。主はあなたがたに初めの雨をほどよく与え、あなたがたのために、雨、初めの雨と後の雨を降らせてくださる。」ヨエル書 2:23。「終わりの日に、と神は言われる、わたしの霊をすべての人に注ぐ。」、「そして、主の名を呼ぶ者はだれでも救われる。」使徒行伝 2:17、21。

福音の偉大な働きは、その始まりを特徴づけた神の力の顕現よりも小さな顕現をもって閉じられることはない。福音の開幕における「前の雨」の注ぎの際に成就した預言は、その終わりにおける「後の雨」において再び成就する。ここに、使徒ペテロが次のように言って待ち望んだ「さわやぎの時」がある。「それゆえ、悔い改めて立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られる。主の御前から『さわやぎの時』が来るとき、主はイエスを遣わしてくださる。」使徒行伝3章19、20節。『各時代の争闘』611ページ。

その試験は、「行に行を重ねる」として表される後の雨の方法論に基づいている。その試験のメッセージは、「異なる言葉」を語り、「どもる唇」を持つ者として表される見張り人によって伝えられる。後の雨のその試験メッセージは、アドベンチズムが反逆の歴史を通して採用してきた背教的なプロテスタント主義とカトリック主義の方法論で訓練されていない見張り人によって告げられるだろう。

試験がすべての魂に臨む時は、そう遠くない。獣の印が私たちに強要されるだろう。これまで一步一步、世の要求に譲歩し、世の慣習に同調してきた人々は、嘲笑や侮辱、投獄の脅し、さらには死に身をさらすよりも、権力に屈することを難しいとは思わないだろう。争いは神の戒めと人の戒めとの間にある。この時、教会において、金は滓から選り分けられる。真の敬虔は、その外見やきらびやかな見せかけとははっきり区別

される。私たちがその輝きを賞賛してきた多くの星は、その時、闇の中に消え去るだろう。豊かな小麦の打ち場にしか見えない場所からさえ、雲のようなもみ殻が風に運び去られる。聖所の飾りをまとっているように見せかけながらもキリストの義を着ていない者はみな、自分自身の裸の恥をさらして現れる。

「実を結ばない木々が土地をふさぐものとして切り倒され、多くの偽りの兄弟が真の者と見分けられるとき、隠れていた者たちは人目に明らかにされ、ホサナの声を上げつつキリストの旗のもとに結集するだろう。これまで臆病で自らを信じられなかった者たちは、キリストとその真理のために公然と身を表す。教会のうちで最も弱く、ためらいがちな者も、ダビデのように進んで行き、また敢えて挑む者となる。神の民にとって夜が深ければ深いほど、星はいよいよ明るく輝く。サタンは忠実な者たちをひどく悩ますだろう。しかしイエスの御名によって、彼らは圧倒的な勝利を収める。こうしてキリストの教会は、『月のように美しく、太陽のように澄みわたり、旗を掲げた軍勢のように恐るべき』姿を現すだろう。」

宣教の働きによってまかれている真理の種は、やがて芽を出し、花を咲かせ、実を結ぶだろう。魂は真理を受け入れ、患難に耐え、イエスのために苦しむに値いとされたことを喜び、神を賛美するようになる。「世にあっては、あなたがたは患難に会う。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝った。」押し寄せる災禍が地上を通り過ぎ、扇が主の打ち場をふり清めるとき、神はご自分の民の助けとなってくださる。サタンの戦利品が高く掲げられることがあっても、清く聖なる者の信仰はひるむことがない。

エリヤは、鋤をひいていたエリシャのもとに行き、彼に自分の聖別の外套を投げかけた。この偉大で厳粛な働きへの召しは、学識と地位のある人々にも示された。もし彼らが自分を小さくし、全く主に信頼していたなら、主は彼らに、御旗を掲げて勝利へと進むという栄誉をお与えになったであろう。だが彼らは神から離れ、世の影響に屈し、主は彼らを退けられた。

多くの人々は科学を崇めるあまり、科学の神を見失ってしまった。最も純粹だった時代の教会はそうではなかった。

「神は、わたしたちの時代に、ごくわずかな者しか予期しないみわざを行われる。神は、学術機関の外面的な訓練よりも、むしろ御霊の油注ぎによって教えられた者たちを、わたしたちの中から起こし、わたしたちの間で高くお用いになる。こうした機関を軽んじたり非難したりすべきではない。これらは神によって定められたものであるが、備えることのできるのは外面的な資格にすぎない。神は、ご自分が学識のあるうぬぼれた死すべき人間に依存してはおられないことを明らかにされる。」 Testimonies, 第5巻、81、82。

「押し寄せる災禍」は、黙示録11章の大地震の時に始まる日曜法の象徴である。それは、段階的な日曜法の試練の時期を表している。

「諸外国はアメリカ合衆国の手本に倣うだろう。たとえ米国が先頭に立つとしても、同じ危機が世界の至る所で私たちの民に及ぶであろう。」 『証言』第6巻、395頁。

日曜法の直前に、ミラーの夢に出てくる偽造硬貨は窓から掃き出され、ラオデキアのアドベンチストたちが主の口から吐き出されるのと同様である。そのとき教会は旗印として高く掲げられ、「月のように美しく、太陽のように輝き、旗を掲げた軍勢のように恐るべきもの」となる。「異なる舌」と「どもる唇」から出るイザヤのメッセージは、学術機関の外面的な訓練によってではなく、御霊の油注ぎによって教えられ、高く引き上げられ、あがめられる者たちを表している。エフライムの酔いどれどもは、「行に行を重ねる」という試しに耐えられない。彼らの賢者の知恵は失われてしまったからである。彼らにとって預言は封印された書のようにってしまった。

ペテロによれば、サムエル以来すべての預言者が語ってきたその歴史は、後の雨のメッセージを退けるアドベンチストの滅びをいくつも示している。しかし彼らが日曜法の時に受けるのは肉体の死ではなく、永遠に失われているという現実を自覚することを伴う霊的な死であり、これは愚かなおとめたちに象徴されている。彼女たちはアモス書において、自分たちが失われているという事実を目を覚ます。

見よ、主なる神は言われる。わたしがこの地に飢饉を送る日が来る。それはパンの飢饉ではなく、水に渴くことでもなく、主のことばを聞くことの飢饉である。人々は海から海へ、北から東にまでさまよい歩き、主のことばを求めて行き巡るが、これを見いだすことはない。その日には、美しいおとめも若い男も、渇きのために衰え果てる。サマリアの罪をさして誓い、『ダンよ、あなたの神は生きている』と言い、また、『ベエル・シェバの道は生きている』と言う者たち、その者たちは倒れて、二度と起き上がることはない。アモス 8:11-14。

『氾濫するむち』という象徴をもって日曜法の時に言及した後、イザヤは、死と契約を結んだ者たちの絶え間ない恐れと不安を取り上げる。

あなたがたの死との契約は無効にされ、よみとの取り決めは成り立たなくなる。あふれかえる災いの鞭が通り過ぎるとき、あなたがたはそれに踏みにじられる。それが出ていくその時から、それはあなたがたを捕らえる。というのは、それは朝ごとに、昼も夜も、通り過ぎていくからである。そして、その知らせを理解するだけでも苦しみとなる。イザヤ書 28:18、19。

ミラーの宝石によって表現されている「知識の増加」に関する理解は、その時には得られなくなる。しかし、「段階的な日曜令危機」に関する報告の「理解」が、彼らの「死との契約」が取り消されたことを示すことになる。「偽りのもとに」身を隠してきた者たちは、そのとき、「主なる神」が「シオンに土台として一つの石、試みられた石、尊い隅の石、確かな土台」を据えられたことを悟るが、すでに手遅れである。彼らが歴史を通じてそのもとに身を隠してきた虚偽は、そのとき一掃される。そうした明白な虚偽の多くは、ウライ川の幻の中に容易に見て取れる。

ミラー派は、ダニエル書2章の理解に照らして、ダニエル書8章に登場する諸王国を、7章で表されているものと同じの王国だと見なした。両章の相違点は、7章がそれらの王国の政治的要素を表しているのに対し、8章は宗教的要素を表していることである。このため、ダニエル書8章は聖所に関する用語で描写されている。

ダニエル書第8章は、諸王国を表すために聖所の象徴を用いているが、その章に登場する聖所の象徴はことごとく汚されており、これによってキリストの真の宗教とサタンの偽りの宗教の区別が示される。雄羊は神の聖所で供え物として用いられた動物だが、聖所の供え物はすべて傷のないものでなければならなかった。第8章のその雄羊は、角が等しくなかったため、神の聖所の供え物としては失格であった。

そのとき、私は目を上げて見ると、見よ、川の前に二本の角を持つ雄羊が立っていた。二本の角はともに高かったが、一方は他方よりも高く、その高い方は後から生えた。
ダニエル書 8:3.

角の長さが異なる雄羊は、神の聖所への捧げ物としては許されない。しかし、その象徴は神の真の宗教のものではなく、サタンの偽りの宗教である異教のものだ。次の王国は雄山羊によって表されており、これもまた聖所の捧げ物である。しかしまたしても、その雄山羊は両目の間に一本の角を持っていたため、聖所の捧げ物に求められる完全な対称性を欠き、瑕のあるものとなっていた。

わたしが思い巡らしていると、見よ、一頭の雄やぎが西から全地の表を進んで来て、地に触れなかった。また、そのやぎの目と目の間には目立つ角が一本あった。ダニエル書 8:5

結局、ヤギの角は折れて四つの角が生じ、そのためそれは神の聖所での供え物としても不適格となった。

それで雄山羊は勢力を増して非常に強くなった。しかし彼が力の絶頂に達したとき、その大きな角は折れ、その代わりに、天の四方に向かって目立つ四つの角が生えた。
ダニエル書 8:8.

ダニエル書第8章は、バビロンの王国が象徴で示されることなく始まる。聖書の予言における最初の王国であるバビロンは、第2章と第7章という二人の証人によってすでに聖書的に確立されているが、第8章では、教皇権が致命的な傷を受け、最終的に癒やされるという預言的特質を強調するために、バビロンは意図的に隠されている。致命的な傷を受けてから癒やされるまでの期間、教皇権は預言的には隠され、あるいは忘れ去られている。この隠されることは、ネブカドネザルの王権が取り上げられ、その後回復されたことによっても表されていた。

ダニエル書第8章は、第二の王国を直接象徴するものとしてメディアとペルシャの王国を表す雄羊がまず描かれ、続いてギリシャの王国を表す墮落した雄山羊が登場する。さらに、ギリシャの四つの角が四方の風に分かれたその四方の風の一つから、ダニエルは第四の王国であるローマを表す小さな角を見る。この小さな角はローマの二つの段階の双方を表しており、それは四つの節に示されている。異教ローマは小さな角が男性形で、教皇ローマは小さな角が女性形で表されている。

そのうちの一つから小さな角が生え出て、南へ、東へ、そして美しい地へ向かって、非常に大きくなった。それは天の軍勢にまで及ぶほどに大きくなり、軍勢の一部と星々を地に投げ落として、それらを踏みにじった。さらに彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ落とされた

. 背きのゆえに、日ごとの献げ物に敵対する軍勢が彼に与えられ、彼は真理を地に投げ落とし、事を行って成功した. ダニエル書 8:9-12

第9節に登場するローマの小さな角は男性形で表され、第10節では女性形で表され、第11節では男性形で表され、そして第12節では再び女性形で表されます。

ダニエル書第8章は第一の王国を隠し、続く二つの王国は墮落した聖所の獣として表され、第四の王国は角によって表される。その角は預言的に墮落しており、男として現れ、次に女として、さらに男として、そしてまた女として現れる。

女は男に属する物を身につけてはならない。また、男も女の衣服を身につけてはならない。このようなことを行う者は皆、あなたの神、主にとって忌むべきものである。申命記 22:5

異教ローマの小さな角の男性形の現れは9節と11節に見られ、教皇ローマの小さな角の女性形の現れは10節と12節に見られる。小さな角の文法上の性は、原文に即してダニエルの言葉を考察することで判別できる。これはミラーには見えなかった。というのも彼はクルーデンのコンコーダンスしか用いず、クルーデンのコンコーダンスは原語に関する情報を提供しないからである。この四つの節にわたる性の交替は欽定訳聖書の翻訳者たちに認識されており、どこに注目すべきか分かっていたら、その箇所での性の区別が保持されていることが分かる。

訳者たちは、9節から12節における「小さな角」の男性形と女性形の区別を認識し、その区別を「it」という語で示した。「it」という語は、「小さな角」が女性形であるときに用いられている。ダニエル書第8章10節参照：

そしてそれは強大になり、ついには天の軍勢にまで及び、天の軍勢の一部と星々の一部を地に投げ落として踏みにじった。ダニエル 8:10.

それは「大いに強くなり」、そして「投げ落とした」。このことにより、小さな角が女であると特定される。第十二節にはこうある：

背きのゆえに、日ごとのいけにえに対して彼に軍勢が与えられ、彼は真理を地に投げ打ち、思うままにふるまって栄えた。ダニエル書 8:12

十二節では「him」という語が付け加えられており、小さな角を正確に表していません。というのも、その節の小さな角は二度「it」として示されており、したがって女性形を表しているからです。翻訳者たちは明らかにダニエルの文法上の性の区別を認識していましたが、ダニエルの意図については確信が持てず、斜体の語「him」を付け加えることでその節の小さな角を男性形にしようとした。しかしそれはダニエル自身の言葉によって裏付けられません。彼の言葉は小さな角を女性形、すなわち「it」として示しており、「it」（女性形の小さな角）が真理を地に投げ捨て、「it」（女性形の小さな角）が実行し、栄えたとしています。

第九節では、「小さな角」という語句は文法上男性形であり、異教ローマを表している。それは、ギリシャ帝国が崩壊して「四方の風」に分かれたうちの一つから出てきた。この節は歴史とも一致しており、異教ローマは地の王座に就くにあって三つの地域を征服

した.

そのうちの一つから小さな角が現れ、南と東、そして麗しい地に向かって、きわめて大きくなった. ダニエル書 8:9.

第11節では（そこは「the daily」をめぐる論争の主戦場の一つとなっている）、小さな角は「he」「him」「his」として表されている.

さらに、彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ倒された. ダニエル書 8:11

次回の記事でこの研究を続けます.

「神の御言葉にあるあらゆる原則はそれぞれしかるべき所を占め、あらゆる事実はそれぞれの意義を持っている. そして、その全体としての構造は、設計においても実行においても、その作者を証ししている. このような構造を構想し、形づくることができるのは、無限なる方の知性以外にはない.」教育、123.